

漱石全集

第十二卷

漱石全集  
第十二卷

初期の文章及詩歌俳句

附  
印譜

昭和四十二年三月三十日 第一刷發行  
昭和五十年十一月十日 第二刷發行

漱石全集 第十二卷

初期の文章及詩歌俳句

定價 二千八百圓

著 者 夏 目 漱 石

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所 株式會社 岩 波 書 店  
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

目次

小品

七

倫敦消息

九

倫敦消息

三五

自轉車日記

五七

評論

六九

老子的哲學

七一

文壇に於ける平等主義の代表者「ウォルト、

ホイットマン」 Walt Whitman の詩について

九三

中學改良策

一一一

英國詩人の天地山川に對する觀念

一四九

『トリストラム、シャンデー』

一八九

英國の文人と新聞雜誌

二〇五

小説「エイルキン」の批評

二一七

マクベスの幽靈に就て

二三七

## 雜 篇

二五三

『銀世界』評

二五五

愚見數則

二五九

人生

二六五

無題

二七一

祝辭

二七三

不言之言

二七五

無題

二八三

作文

二八五

正成論

二八七

觀菊花偶記

二八八

居移氣說

二八九

對月有感

二九一

山路觀楓

二九三

故人 到

二九六

故人 來

二九八

母 の 慈

西詩意譯

三〇〇

二人の 武士

西詩意譯

三〇二

Japan and England in the Sixteenth Century.

三〇四

翻 譯

三〇七

催 眠 術 (アーネスト、ハート)

三〇九

詩伯「テニソン」(オウガスタス、ワード)

三一七

セルマの 歌 (オシアン)

三三五

カリツクスウラの 詩 (オシアン)

三三九

A Translation of Hojio=ki

三四三

英詩

三六七

漢詩文

三九三

漱石詩集

三九五

木屑錄

四四五

漢詩文拾遺

四五三

和歌

四六一

新體詩

四六五

俳體詩

四七七

連句

五〇九

俳

句

五一七

季

題

別

七四七

印

譜

八二七

解

說

八三七

注

解

八六七

小

品



## 倫敦消息

### 一

#### 倫敦消息

(前略) 夫だから今日即ち四月九日の晩をまる潰しにして何か御報知を仕様と思ふ。報知し度と思ふ事は澤山あるよ。こちらへ來てからどう云ふものかいやに人間が眞面目になつてね。色々な事を見たり聞たりするにつけて日本の將來と云ふ問題がしきりに頭の中に起る。柄にないといつてひやかし給ふな。僕の様なものがある問題を考へるのは全く天氣のせいや「ビステキ」のせいではない天の然らしむる所だね。此國の文學美術がいかに盛大で、其盛大な文學美術が如何に國民の品性に感化を及ぼしつゝあるか、此國の物質的開化がどの位進歩して其進歩の裏面には如何なる潮流が横はりつゝあるか、英國には武士といふ語はないが紳士と(いふ)言があつて、其紳士は如何なる意味を持つて居るか、如何に一般の人間が鷹揚で勤勉であるか、色々目につくと同時に色々癢に障る事が持ち上つて來る。時には英吉利がいやになつて早く日本へ歸り度なる。すると又日本の社會の有様が目に浮んでたのもしくない情けない

様な心持になる。日本の紳士が徳育、體育、美育の點に於て非常に缺乏して居るといふ事が氣にかゝる。其紳士が如何に平氣な顔をして得意であるか、彼等が如何に浮華であるか、彼等が如何に空虛であるか、彼等が如何に現在の日本に満足して己等が一般の國民を墮落の淵に誘ひつゝあるかを知らざる程近視眼であるか、杯といふ様な色々な不平が持ち上つてくる。先達て日本の上流社會の事に關して長い手紙を書いて親戚へやつた。然しこんな事は只英國へ來てから餘計に感ずる様になつた迄でちつとも英國と關係のない話だし、君等に聞せる必要もなし、聞き度事でもなからうから先ぬきとして何か話さう。何がいか、話さうとすると出ないものでね、困るな。仕方がないから今日起きてから今手紙をかいて居る迄の出來事を「ほとゝぎす」で募集する日記體でかいて御目にかけ様。出來事だつて風來山人の生活だから面白可笑しい事はない、頗る平凡な物さ。「オキスフォード」で「アン」を見失つたとか、「チエヤリングクロス」で決闘を見たとか云ふのだと張合があるが、如何にも惘然な生活だからくだらない。然し僕が倫敦に來てどんな事をやつて居るかが一寸分る。僕を知つて居る君等にはそこに少々興味があるだらう。

此前の金曜が「グード、フライデー」で「イースター」の御祭の初日だ。町の店はみんなやすんで買物杯は一切禁制だ。明る土曜は先平常の通りで、次が「イースター、サンデー」又買物を禁制される。翌日になつてもう大丈夫と思ふと、今度は「イースター、モンデー」だといふので又店をとどろる。火曜になつて漸く故に復する例である。内の夫婦は御祭中田舎の妻君の里へ旅行した。田中君は「シエクス

ピヤ」の舊跡を探るといふので「ストラトフオドオンアヴオン」と云ふ長い名の所へ行かれた。跡は妻君の妹と下女のペンと吾輩と三人である。

朝目がさめると「シャツター」の隙間から朝日がさし込んで眩い位である。これは寢過したかと思つて枕の下から例のニツケルの時計を引きずり出して見るとまだ七時二十分だ。まだ第一の銅羅の鳴る時刻でない。起きたつて仕方がないが別にねむくもない。そこでぐるりと壁の方から寢返りをして窓の方を見てやつた。窓の兩側から申譯の爲に金巾だか麻だか得體<sup>\*</sup>の分らない窓掛が左右に開かれて居る。其後に「シャツター」が下りて居て、其一枚／＼のすき間から御天道様が御光來である。ハ、ハ愈春めて來て有難い、こんな天氣は倫敦ぢや拜めなからうと思つて居たが、矢張人間の住んでる所丈あつて日の當る事もあるんだなと一寸悟りを開いた。夫から天井を見た。不相變ひゞが入つて居て不景氣だ。上で何かごと／＼いふ音が聞こえる。下女が四階の室で靴でもはいて居るんだらう。部屋は益あかるくなる。銅羅はまだ鳴りさうな景色がない。今度は天井から眼をおろしてぐる／＼部屋中を検査した。然し別に見るものも何にもない。まことに御恥しい部屋だ。窓の正面に簞笥がある。簞笥といふのは勿體ない、ペンキ塗の箱だね。上の引出に股引とカラとカフ<sup>\*</sup>が這入つて居て、下には燕尾服が這入つて居る。あの燕尾服は安かつたがまだ一度も着た事がない。つまらないものを作つたものだと考へた。箱の上に尺四方許りの姿見があつて其左りに「カル、ス」<sup>\*</sup>泉の瓶が立て居る。其横から茶色のきたない皮の手袋が半分見える。箱の左側の下に靴が二足、赤と黒だ、並んで居る。毎日穿くのは戸の前に下女が磨い



仕まつがいい。大工がかんなをかける様にスー／＼と髭をそる。いゝ心持だ。夫から頭へ櫛を入れて、顔を拭て、白シャツを着て、襟をかけて、襟飾をつけて「シャツター」を捲き上ると、下女がボコンと部屋の前へ靴をたゝきつけて行つた。暫くすると第二のゴン／＼が鳴る。一寸御詔通りに出来てる。夫から階子段を二つ下りて食堂へ這入る。例の如く「オートミール」を第一に食ふ。是は蘇格蘭人の常食だ。尤もあつちでは鹽を入れて食ふ、我々は砂糖を入れて食ふ。麥の御粥みた様なもので我輩は大好きだ。「ジョンソン」の字引には「オートミール」……蘇國にては人が食ひ英國にては馬が食ふものなりとある。然し今の英國人としては朝食に之を用いるのが別段例外でもない様だ。英人が馬に近くなつたんだらう。夫から「ベーコン」が一片に玉子一つ又はベーコン二片と相場がきまつて居る。其外に焼パン二片茶一杯、夫で御仕舞だ。吾輩が二片の「ベーコン」を五分の四迄食ひ了つた所へ田中君が二階から下りて來た。先生は昨夜遅く旅から歸つて來たのである。尤も先生は毎朝遅刻する人で決して定刻に二階から天下つた事はない。「いや御早ふ」。妻君の妹が Good morning と答へた。吾輩も英語で Good morning とゝつた。田中君はムシャ／＼やつて居る。吾輩は Excuse me といつて食卓の上にある手紙を開いた。「エツデヒル」夫人から此十七日午後三時に緩々御話しを伺ひ度から御出被下間敷やといふ招待狀だ。おや／＼と思つた。吾輩は日本に居つても交際は嫌いだ。まして西洋へ來て無辯舌なる英語でもつて窮窟な交際をやるのは尤も厭ひだ。加之倫敦は廣いから交際杯を始めると無暗に時間をつぶす、御負にきたない「シャツ」杯は着て行かれず、「ツボン」の膝が前へせり出して居てはまづいし雨

のふる時杯はなさない金を出して馬車杯を驕らねばならないし、夫は／＼氣骨が折れる、金が入る、時間が費へる、眞平だが仕方がない、たまにはこんな酔興な貴女があるんだから行かなければ義理がわるい、困つたなと思つて居ると、田中君が旅行談を始めた。吾輩に「シエクスピヤ」の石膏製の像と「アルバム」をやらうと云ふから難有ふといつて貰つた。夫から「シエクスピヤ」の墓碑の石摺の寫眞を見せて、こりや何だい君、英語の漢語だね、僕には讀めないといつた。やがて先生は會社へ出て行つた。是から吾輩は例の通り「スタンダード」新聞を讀むのだ。西洋の新聞は實にである。始から仕舞まで残らず讀めば五六時間はかゝるだらう。吾輩は先第一に支那事件の處を讀むのだ。今日のは魯國新聞の日本に對する評論がある。若し戰爭をせねばならん時には日本へ攻め寄せるは得策でないから朝鮮で雌雄を決するがよからうといふ主意である。朝鮮こそ善い迷惑だと思つた。其次に「トルストイ」の事が出て居る。「トルストイ」は先日魯西亞の國教を蔑視すると云ふので破門されたのである。天下の「トルストイ」を破門したのだから大騒ぎだ。或る繪畫展覽會に「トルストイ」の肖像が出て居ると其前に花が山をなす、夫から皆が相談して「トルストイ」に何か進物をし様ななんか「トルストイ」連は燒氣になつて政府に面當をして居るといふ通信だ。面白い。さうかうする内に十時二十分だ。今日は例の如く先生<sup>\*</sup>の家へ行かねばならない。先づ便所へ行つて三階の部屋へかけ上つて仕度をして下りて見るとまだ十一時には二十分許り間がある。又新聞を見る。昨日は「イースター、モンデー」なので所々で興行物があつた。其雜報がある。「アクエリウム」で熊使ひが熊を使ふと云ふ事が載つて居る。熊